企業組合 県木住

住宅展示場を〝わが家〟に

〈展示場を見学したい〉と予約のメールが入っていたのは、年明け（2022年）1月3日。青森市石江の「アーバ・タウン合同展示場」で開催する「お正月フェア」への申し込みだった。見学希望日は翌4日。その朝、企業組合県木住の佐藤時彦代表は展示場の薪ストーブに火を入れて待機した。暖まったころに雪の中を渡邉様ご家族が到着。リビングに上がったお嬢ちゃんが、歓声をあげながら走り出した。「床のスギの足触りが心地良かったんでしょうね」と佐藤代表。全身で表現するのが子供である。目を細めて見やるご夫婦。その場で一気に資金計画まで話が進んだ。「買います」と連絡がきたのは1週間後であった。

「木の家」と薪ストーブ

タイミング合った

地元工務店が結集して〝集客力を高めよう〟と、6社が参画して2020年9月にオープンした合同展示場が「アーバ・タウン石江」だ。県木住も、その一角に薪ストーブのある「木の家」の展示場を建てた。1年間展示し、売却して、次にまた同じ形態で青森市内に同じメンバーで合同展示場を展開していく。

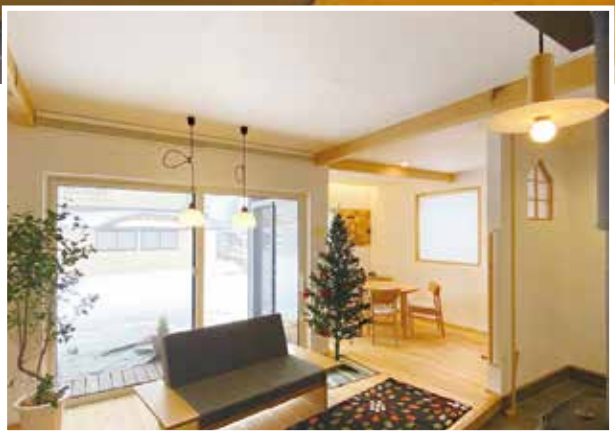
佐藤代表の話　売却の追い込みをかけようと年明け早々にフェアを開催したのですが、結果的にはそれと渡邉様との〝タイミング〟とがぴったり合った

ユーザー訪問

渡邉 匠哉・栄美子 様邸

DATA
青森市石江
2022年1月購入（2020年9月に竣工した県木住展示場を渡邉様が購入した）
■延べ床面積／34.67坪（114.84㎡）
■使用青森県産材／ヒバ（土台）、スギ（一部外壁、柱、ウッドデッキ）、アカマツ（梁）。

床には清潔感のある木肌の県産のスギ板が敷き詰められている



暖かな陽光が降り注ぐリビングの大開口

1台で家中の暖房を賄う薪ストーブ

のです。

〝タイミング〟とは、異動のことです。渡邉様は転勤族で、毎年3月に異動が発表になります。渡邉様が展示場を見学にこられた時点では、お住まいは八戸市のアパートでした。異動になってもならなくても、1歳半になったお嬢ちゃんを入園させると決めている保育園は青森市内にあるし、その保育園の近くで、転勤になっても通うのに便利な新青森駅周辺のアパートを探すか、借家にするか、あるいは建売りを買うか――いずれかに決めようと思っていたそうです。

そんなときに、「展示場売却」の文字が奥様の目に飛び込んできたのでしょう。それまでも奥様はたまに当社のホームページをご覧になられていたそうで、その日も、開いてみたら、「売却」の知らせが載っていたそ

2階には部屋の仕切りがなく、お嬢ちゃんが元気に走り回れる

うです。建売りの購入も考えにあったから「売却」の文字に反応されたのだと思います。そこから始まりました。

——たまに県木住のホームページをご覧になっていたということですが、県木住の家づくりに関心があったのですか？

奥様の話　そもそも県木住を知ったのは「料理教室」なんです。わたしの体をもっと健康しようと行き着いたのが、十和田市にある石井ともみ先生の料理教室でした。今の時代には食べられなくなってしまったアワとかヒエ、キビなどの雑穀には栄養素が豊富に含まれていて、

布団を干せるように窓を幅広くした2階の廊下

ご飯に混ぜるだけでなく、雑穀それぞれの持ち味を生かして料理を創作する教室なんです。体に良さそうなので、時間のあるときに通うようになって6年くらいになります。てっきり肉だとばかり思って食べたハンバーグが、キビだと知ってびっくりしました。食感がまるで肉なんですよ。穀物に秘められた神秘の力を感じましたね。

ご主人の話　〝子供を自然に育てる〟ことをモットーにした保育園に娘を入れることにしたのも、妻の料理教室と同じことなんです。食べ物も、住む環境も〝自然〟が一番健康にいいのは子供も大人も一緒ですからね。

奥様の話　石井先生も2人のお嬢ちゃんを、青森市内の同じ教育方針の保育園に通わせたそうです。そこで県木住の社員の方と知り合ったんだそうです。

——その保育園に、県木住の社員がお子さんを通わせていたのですね（石井様邸の竣工は2013年。「青森県産材でエコな家づくり』Ⅳに掲載）。

奥様の話　料理教室は、石井先生のご自宅の中にあって、「木の家」で薪ストーブが燃えている様子が暖かそうでいいなと思っていたんです。いつか建てるときがきたらこういう家にしたい、とね。と言っても、漠然としたもので、何も決まっていなかったけど、振り返ってみれば、その時点で間接的にだけど〝出会って〟いたんですね、石井先生のお宅を建てた県木住と。料理教室を通じて知った弘前市の高杉多希さんも「料理教室＆雑穀カフェ」を開いていて、ご自

宅を県木住で建てたそうです（２０１７年竣工。『青森県産材の家』Ⅷに掲載）。そうなると、建てる建てないは別にして、近しさのようなものを感じますよね。それからです、たまに県木住のホームページを開いて見るようになったのは。

「展示場売却」のときもそうで、いつものように何気なく見てみたんです。そしたら……。1月3、4日に「お正月フェア」が開かれるというから、さっそく3日に申し込みをして、4日に行ったんです。ほんとうにタイミングが良かったんです。展示場の場所も、希望していた新青森駅周辺の石江です。保育園にも近いし、通勤にも便利です。何より県木住の展示場だしね。

床のスギがきれい

ご主人の話　玄関から入ってまず目に入ったのが床のスギでした。きれいだって思いましたね。木肌に清潔感がありました。アパートの床とは見ただけで違います。青森県の山で育ったスギだと、佐藤さんが教えてくれました。無垢材だそうです。〝無垢〟という言葉はふだん生活していてあまり使う言葉ではありませんけど、佐藤さんが言った「無垢」の新鮮な響きと、リビングの床のスギがぴったり合った感じがしましたね。

言葉で表現すれば単に「心地いい」となるんでしょうけど、子供ってそれを体で表すんですね、靴を脱いで上がるとリビングを走り出したんですよ。アパートに住んでいたときにはないことでした。喜んではしゃいでいる姿を見たら、なんだかこっちも嬉しくなってきてね。結局はそれで決めたようなものです。今でも娘は保育園から帰ってくると、さっそく靴下を脱ぐんですよ。

薪ストーブの煙突が2階をほんのりと暖めてくれる

奥様の話　あのときの「お正月フェア」は私たちのために開いてくれたんじゃないかって今でも思うんですよ。注文して建てたみたいに私たち家族にぴったりです。家の広さも、広すぎず狭すぎずちょうどいいし、それに2階の開放的な造りも気に入っています。娘が成長して、部屋がほしくなればそのときにドアを付ければいいしね。それまでは走り回ってのびのびと元気に育ってほしいものです。

青森の木で家をつくる　企業組合
県木住
企業組合 県木住

青森市浪岡大字徳才子字福田60-2
TEL.0172-55-7793 FAX.0172-55-7559
http://www.kenmokujyu.com E-mail : info@kenmokujyu.com

お知らせ

地元6社合同「アーバ・タウン造道」
2023年7月　県木住展示場オープン

企業組合 県木住

第2のステージへ刷新

地元の山の木を使って建てる「青森県産材の家」のハシリが、21年前に建てた松尾浩昭様邸であった。ご主人の父親が所有する山に昔、祖父がスギを植えた――。育ったそのスギを使って建てようと提案したのが、企業組合県木住の佐藤時彦代表だった。一緒に山へスギを見に行って選んだ1本が、松尾様邸のリビングに2階まで通しで立つ6mの大黒柱だ。建てた後も21年間ずうっと続く施主と工務店との繋がりがあるから、夫婦2人だけの住まいへ変える今回のリノベーションも当然また県木住に依頼した。〝信頼〟のシンボルとして大黒柱は、第2ステージに立ち続ける。

ユーザー訪問

松尾 浩昭 様邸

DATA
青森市雲谷
2022年10月
■延べ床面積（改築後）／55.00坪（182.18㎡）
■使用青森県産材／ヒバ（土台）、スギ（床、柱、大黒柱）、アカマツ（梁）、カラマツ（廊下一部内壁）、セン（階段踏み板）、ブナ（テレビ台カウンター）。

築21年をリノベーション

和室をキッチンに

午前中に引き渡しが行われたその日の午後、松尾様邸に伺った。改修以前はキッチンだった場所が、新品の薪ストーブが鎮座するタイル張りの土間に変わっていた。薪ストーブの煙突が2階の天井まで立ち上がっている。キッチンの真上にあった和室を撤去して吹抜けにし、そこに煙突を立てたのだと気が付いた。

目を瞠ったのは、キッチン。改修前の和室が、そっくりキッチンに生まれ変わっていたのだ。天板の幅が約1mもある人工大理石の豪華なキッチンが、建

改修前（写真下）は、中二階に上がる階段の右側に床の間付きの和室があった。改修後（写真上）は、階段の位置はそのままに、和室がそっくりキッチンに生まれ変わった

てた当初からそこにあったかのように違和感なく納まっている。

ダイニングテーブルに松尾様ご夫婦と向き合った。ご主人が煙突を指差して、「そこが吹抜けになったら、2階の窓から下まで陽光が射し込むようになって、すごく明るくなりました」と目を細めた。

「リフォーム前の見学会」が松尾様邸で開かれたのは今年5月。〝改修前〟を見ておけば〝改修後〟がどう変わったかが分かる――という趣旨だ。見学者のひとりが、「直さなくても充分住めそう」と呟いていたのを憶えている。それだけ室内は経年を感じさせず綺麗であった。

そこで、リフォームしようと思ったきっかけから伺った。

ご主人の話　下の娘が北海道の大学に進んだのが3年前で、その頃から、家の中心に薪ストーブを置きたいと考えるようになったんですよ。でも、以前の家の中心にはキッチンがあったので、薪ストーブだけをそこに移すというわけにはいきませんでした。

娘が使っていたのはキッチンの真上の和室でした。進学して

キッチンがあった場所に念願の薪ストーブを置き、真上の和室を取り払った開放的な吹抜けに煙突が真っ直ぐに立ち上がる

そこが空室になったんです。これからは夫婦2人だけの生活ですし、誰もその部屋は使いません。すると、生活の中心に薪ストーブを置きたいという、漠然とだった考えが現実味を帯び出したんです。キッチンを移して、そこに薪ストーブを置く。真上の和室を取り払って吹抜けにする――。薪ストーブから真っ直ぐ立ち上がる煙突が見えるようでしたね。

キッチンは、リビングの北側にあった和室に移すことにしました。建てたあの当時は、客間として和室があるのは普通だったから設けましたけど、お客様といってもそう来るわけじゃないし、いわば空き部屋になっていました。

和室をキッチンに変えたら、まるで〝家が生き返った〟感じがしましたよ。キッチンに立つと真正面の掃き出し窓越しに裏山の林が見えるし、大黒柱のてっぺんまで見えるし、その隣の、念願だった家の中心に置いた薪ストーブも見えるわけですよ。以前のキッチンからだと、顔をあげれば正面がダイニングの壁でしたからね。見渡せる角度がぐんとワイドになりました。

祖父が植えたスギ

――そもそも県木住との出会いは？

ご主人の話　私が幸畑のアパートに住んでいたときですからもう22年くらいの前になりますが、そのアパートの前で、佐藤さん（佐藤代表）とお会いしたんですよ。私が何か荷物を車に積み込んでいるときだったか、そこに佐藤さんがやってきたんです。うろ憶えですけど、たぶん幸畑団地内に県木住（当時は青森県木造住宅普及推進協同組合）の展示場が建つので、あるいは完成したばかりなので、そのお知らせに訪問して回っていたのだったかもしれません。そのときに、立ち話ですけど、私の父親が蟹田に山を持っていて、祖父が植えたスギが樹齢30～40年くらいになっていると話したんですよ。そしたら佐藤さんが、「じゃ、そのスギを使って建てませんか」って言ったんです。その言葉が、すごく新鮮に感じられたんですよ。山の木を伐って建てるなんて考えもしませんでしたからね。

その後で知ったことですけど、青森県のスギの人工林の面積は全国的に多く、その消費拡大を進める目的で県が〝スギを使った家づくり〟を推進するようになったんだそうですね。わが家はそのハシリだったというわけです。

実は、佐藤さんと出会う前

に、ログハウスで建てる計画を進めていたんです。でも、ログハウスが日本の湿気が多い気候風土には合わないのだと住宅の雑誌で読んだことや、依頼しようとしていた業者について芳しくない評判が聞こえてきたりして、話はそこでストップしました。評判の出所というのが私の知人で、実際にその業者でログハウスを建てたのにそう言うのだから、〝待て〟となりますよね。

——県木住の展示場に行ったのはその後ですか？

ご主人の話　そうです。玄関に入ったときにスギのいい匂いがしたことを今でも憶えていますよ。ログハウスでなくても、山荘風な展示場の造りでも充分に「木の家」の雰囲気がありました。佐藤さんが展示場の内部を案内してくれました。気に入ったのはリビングの吹抜けに現わしになった梁です。自然の木の持つ野性味のようものが伝わってきました。たぶんそこで県木住に頼もうと気持ちが固まったんだと思うんです。その次に佐藤さんとお会いしたのは蟹田の山でした。スギを見てもらいに案内したんです。これにしましょう、と佐藤さんが選んだスギが、(ご主人が指差して)そこに立っている大黒柱です。

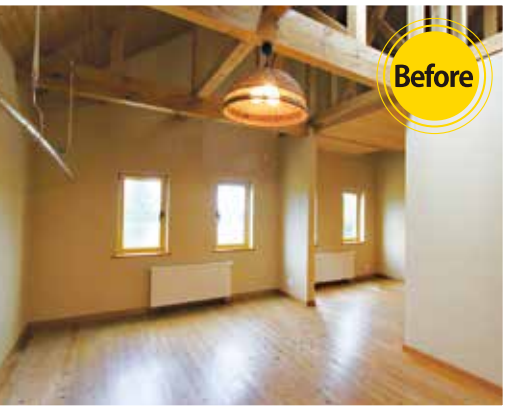
——リフォームするに当たって最近の家はどんな造りになっているか何社かの展示場を見学されたそうですが、どんな印象でしたか？

ご主人の話　後学のためにね。今はどの展示場でも「木を使う」ことが主流になっているらしく、「無垢の木を使っています」と係員が強調していました。でも、節もなく、表面がきれいすぎて、〝味わい〟がありませんでしたね。「木」ってもっと素朴なものだと思うんですよ。乾燥してひびが入ったり、節があるのは当たり前だしね。それが節一つなく、ピカピカで、むしろ木ではないような感じがしましたね。室内の造りも、キッチンも洗面も浴室も、ともかく見えるところはみなきれい。きれいすぎて目が疲れるみたいな……。素朴だからこそ癒されるんですよね。

ずっとお付き合い

——玄関の上がり框をアールにしたのは奥様のご要望とか。

奥様の話　(頷いて)ここもそうなんですよ(と窓際の床を指差した)。図面上では、リビングからテラスに出る掃き出し窓のところまで床板を張ることになっていたんですけど、窓の手前を3尺幅のタタキにして、薪ストーブを置いてあるタタキと繋げてもらったんです。通路みたいにね。そうすると、裏庭から薪を運んできたときに、いちいちサンダルを脱がなくてもストーブのところまで持っていけますでしょ。その通路の端を、



中2階の洋室。室内の壁のビニールクロスを漆喰に塗り替え、まるで新築同然に

食器棚だった部分はランドリースペースに再利用

直線ではなくアールにしたんです。玄関もそれに合わせました。真っすぐの線と、アールでは、見た目の柔らかさが違いますものね。

ご主人の話　普通、ああしたい、こうしたいって要望すれば、難しいとか、できないとか、嫌がられるじゃないですか。でも逆に、どうしたらそれを叶えられるか、一生懸命考えてくれるところが県木住のスタッフの素晴らしいところなんですよ。それは21年前の新築時にも感じていたことです。お客の要望に応えてこそ工務店というような心意気があるんでしょう。だからこそずっとお付き合いしてきたし、当然リフォームもお願いすることにしました。

奥様の話　打ち合わせをして、家に帰ってくると、じっくりと打ち合わせしたはずなのに、あそこはああしたほうがよい、ここはこうしたい、って次々とまた要望が浮かんでくるんですよ。それをまた打ち合わせして、帰ってくるとまたあれこれ……。夫婦の会話はもっぱらリフォームのことでした。以前の食器棚も新しいランドリースペースに再利用してもらいましたしね。中2階の部屋も、壁の漆喰を塗り替えただけで建て替えたみたいに明るくなりましたよ。

ご主人の話　新築のときよりも、今回のほうがじっくり家づくりに取り組んだ充実感があります。それと、大工さんの〝すごさ〟を再認識しました。

佐藤代表のコメント

松尾様から、「相談があります」という連絡を頂戴したのが2年前です。

松尾様邸は21年前に、自分の山の木で家をつくろうという県木住オリジナルメニューを実践したアクティブな家づくりでした。松尾様も若かったし、私も若かったし、これいいよね、やってみよう、とチャレンジ意欲にあふれていた時でした。使う木材もスギ、ヒバ、アカマツという県産材トリオのほかに、カラマツ、セン、ナラ、エンジュ、オンコ、ブナなど多種にわたり、〝さすが青森県〟と感じる贅沢な家づくりでした。松尾様のおじいさんが植えたスギを伐って立てた大黒丸太もあり、祖父から孫への思いが伝わる感慨深い家づくりでもありました。

山から伐り出した丸太をグラインダーで磨いたり、漆喰塗りや、スギ床の塗装なども松尾

キッチンの真正面の掃き出し窓越しに裏山の林が見える

様と共にやったことは今でも鮮明に記憶に残っています。一緒に家を作った、一緒に家づくりを楽しんだ感が強烈にあります。食器棚も家具屋手づくりのオリジナル品であったし、照明器具のセードもアケビ弦細工のものを使うなど、地元愛が感じられるものが採用されました。木だけでなく、地元のアケビ蔓まで暮らしに採用する『県産材の家』の先駆けでもありました。

それから21年がたち――「相談があります」と電話を頂戴したときに予感したとおり、家のリノベーションを計画しているとのことでした。子育てが終わり、これからのご夫婦のための家に改造したい、と。21年前とは家づくりのテーマが変わったのです。今度は、〝2人でこんな暮らしがしたい〟というのがテーマです。

いつものようにまずは設計前のヒアリング。「こういう暮らしをしたいから、こういうふうに作ってほしい」という「家に対しての要望」ではなく、「目指す暮らし方」がどんなものであるかを伝えてもらいました。年齢を重ねた私も今は、「家をつくる」という考えかたから、「暮らしをつくる」という考え方にすっかり変わって、要望の聞き方も変わってしまっていたのかもしれません。目指す暮らし方をイメージしたうえで、「であればこういう風にしましょうか」と提案し、新しい暮らしづくりに取り組ませていただきました。若い時の勢いとは違う、年齢を重ねた安定感というものが、松尾様にも私にもあったのではないかという気がします。

どんな家でも時とともに家族構成は変わるし、求める暮らしも変わるので、時々、家の手直しや改造は必要になってきます。今回の松尾様は、間取りの改造はしましたが、内装仕上げの材料をみると、床は今度もスギ板で、壁は漆喰と、今までと同じ材料にしました。とりわけ県木住が普及に力を入れてきた「スギ床」が当然のようにまた選ばれたことが嬉しく、感謝の気持ちで一杯です。

これからも松尾様ご夫妻の新しい暮らしを全力でサポートさせていただきます。

室内が新しくなった分、以前のままのウッドデッキの山小屋風な趣が増したよう

玄関に建てたスギの格子が目に柔らかい

青森の木で家をつくる 企業組合 県木住

企業組合 県木住

青森市浪岡大字徳才子字福田60-2
TEL.0172-55-7793 FAX.0172-55-7559
http://www.kenmokujyu.com E-mail : info@kenmokujyu.com

企業組合 県木住

外観に〝和〟を添える

青森市浪岡に企業組合県木住の新事務所が移転オープンしたのは、2020年4月のこと。東北自動車道浪岡ICを下りてすぐの場所だ。その前年、そこで建物を建てているのを相馬恭佐様は通勤途中の車から目にしていた。柱が立ち、三角の屋根がかかった建物はどう見ても2階建ての住宅だが、周りに家もなく、広い土地だけど分譲地でもないようだし……と行き帰りに出来上がっていく様子が気になったのは、相馬様に新築計画があったからだ。

完成した建物の前の看板を見て「県木住」という地元工務店の事務所なのだと初めて知った。そこから始まった。

ユーザー訪問

相馬 恭佐（きょうすけ）・ちさと 様邸

DATA
青森市浪岡
2022年1月竣工
■延べ床面積／32.87坪（約108.88㎡）
■使用青森県産材／ヒバ（土台）、スギ（柱、床、内壁、建具）、アカマツ（梁）など。

地元の木に安心感

――県木住のことは知りませんでしたか。

ご主人の話　30歳まで北海道で暮らしていまして、こっちに帰郷したのが2年前ですから、まだ知りませんでした。ネットで検索してみて、地元の工務店だと知ったんです。ホームページに載っていた薪ストーブの炎が暖かそうでした。室内は床も壁も「木」で、その雰囲気と薪ストーブが似合っていましたね。〝良さそう〟――が第一印象でした。完成したばかりの事務所で「勉強会」が開かれると知ってすぐに申し込みました。

勉強会の当日、事務所へ行って目にした「木」を張った室内は、写真より格段に良かったです。柔らかな感じの床板が、スギはスギでも地元青森のスギを製材したものだとは説明を聞いて知りました。〝地元〟にこだわった家づくりをしているの

キッチンとひと続きになった開放的なリビング

だな、と思ったときに、「県」と「木」と「住」が結び付いたんです。それで「県木住」なんだと。

地元の木を使う――妻はそれだけで県木住に決めたと言ってもいいくらいです。「外材」と聞いただけで拒否反応を示すんです。

奥様の話　（頷きながら）わたし、「外材」はハナから×（バツ）です。外国から木を船で運んできて、防虫処理するとはいっても生き残る虫もいるそうだし、アトピーの原因にもなるとも聞いたし、遠くからわざわざ運んでこなくたって国産の木があるんだしね。

やはり安全なのは国産です。しかも県木住は青森の木を使うというのですから、もうそれだけでOKでした。家づくりの細かなことは主人にお任せで、ともかく健康に暮らせる家であればね。

ソファの背後は畳敷きの小上がり。今は小学生のお子さんの勉強部屋を兼ねている

施主の相馬ご夫妻

2階ホール。煙突そばの梁に取り付けた白い金具は洗濯干し用で、取り込んだ洗濯物をその脇の台でたたむ

ご主人の話　それと、会社が〝近くにある〟ということが大きかったですね。建ててからも、何があっても近いっていいじゃないですか。県木住が浪岡に移転したのも〝縁〟があったんでしょうし、ちょうどタイミングよく「勉強会」にも参加できましたしね。その勉強会の内容も、例えば断熱材はどうとか、家の中の気密はこうとか、聞いても分からないような住宅性能の説明ではなく、〝暮らし方〟の話でした。「木」と「漆喰」の自然素材に囲まれた室内環境のこととか、薪ストーブの暖かさとかね。「家」を売るための内容ではなく、健康な暮らしをするための勉強会で、そのことにもいい印象を抱きましたね。

もう1社、他の工務店の住宅も見学してみたんですけど、やはり県木住の第一印象が良かったです。毎日、通勤の通りすがりに事務所が見えますしね。自然と親近感も抱いていたんでしょう。

――庭の薪棚にびっしりと薪が積まれていますが、どこで調達されたのですか？

煙突まわりの格子状の床は、階段下の薪ストーブの熱が隙間を通って上がってきやすいようにと工夫されたもの

ご主人の話　たいがいは県木住の「薪割り会」でです。去年、5回参加しました。春から、真夏の暑い盛りは休んで、秋にかけて5回開かれました。毎回行きました。いやぁ、ありがたいユーザーサービスですよ。そこに行けば割る丸太が準備されていて、割った分持ち帰れるんですから、大助かりです。周りに人家がないので音を気にせずに割れますしね。薪を車に積んで、10分程度でわが家ですから、やはり〝近い〟というのは何かにつけていいものです。

＊

取材後、1階のリビングから撮影。カメラを向けていて、洗面所の隣の、脱衣室の戸の上部が〝開いている〟のに気が付いた。これは何のためだろう？「冬に脱衣室が寒くないようにと考えてくれたんです」とご主

木を切り抜いて作られたトイレのドアの男女のマーク

脱衣室の戸の上部には冬に寒くならないように、薪ストーブの熱を取り入れるための隙間が開けられている

人が説明してくれた。「小型の電気ストーブを置かなくても、そこから薪ストーブの熱が入ってくるから、冬も寒くありませんでしたよ」

細かな配慮はそれだけじゃなかった。奥様が話す。「キッチンの後ろの棚に細いパイプを付けて物を下げるようにしてくれたのがとっても便利です。それと、トイレの戸に貼り付ける男女のマークも、わざわざ木を切り抜いて作ってくれたんですよ」

ご主人が、「ここもそうなんですよ」と2階のホールの、煙突が立つ床を指差した。「階段下の薪ストーブの熱が、隙間を通って上がってきやすいように格子にしてくれたんです」

煙突の近くの梁に取り付けた金具は物干し用だ。透かし階段と、格子からの熱とで洗濯物が実によく乾くそうだ。洗濯物を取り込んでその場でたためるように、階段上のスペースを利用した腰高の台まで設けてある。「洗濯は私がやるんですよ」と笑うご主人。趣味なのだそうだ。施主と設計者との密な打ち合わせがあってこその使い勝手の良さだろう。

外に出て、建物の正面から撮影。細かな配慮は外観にもあった。ご主人が正面の2階の窓を指差して、「西日が当たるから、日除け戸を付けてくれたんです。昔風なよろい戸にしたのがこだわりだそうですよ」

配慮が行き渡った家づくりこそが施主に満足感を与える——。写真に納まったご夫婦の笑顔にそのことが表れていた。

庭の薪棚にびっしりと積まれた薪は県木住の「薪割り会」で調達

青森の木で家をつくる 企業組合 県木住

企業組合 県木住

青森市浪岡大字徳才子字福田60-2
TEL.0172-55-7793 FAX.0172-55-7559
http://www.kenmokujyu.com E-mail : info@kenmokujyu.com

県木住事務所